# 豊臣大坂城天守の復元的研究

佐藤大規

## はじめに

羽柴（豊臣）秀吉が天正十三年（一五八五）頃築造した大坂城天守は、安土城天主が焼失してからわずか三年後に建てられたものである。宣教師の記録[1]によると、大坂城は安土城を凌ぐ城郭であり、天守も安土城天主をさらに豪華にしたものと考えられる。天守は、慶長二十年（一六一五）の大坂夏の陣に際して焼失してしまったが、復元資料として、初重の平面規模が分かる「中井家本丸図[2]」および外観を写生的に描いた「大坂夏の陣図屏風[3]」・「大坂冬の陣図屏風[4]」・「大坂城図屏風[5]」などがあり、詳細な資料批判をした上で、復元考察を行うことが可能である。

これまで、古川重春氏[6]や宮上茂隆氏[7]などによって復元案が提示されているが、そのほとんどが「大坂夏の陣図屏風」を根拠に復元したものであって、「大坂冬の陣図屏風」や「大坂城図屏風」を用いた復元はほとんどない。しかし、「大坂夏の陣図屏風」を詳細に検討してみると、建築学的問題点が少なくないばかりか「中井家本丸図」との矛盾点が見られる。

そこで本稿では、「大坂夏の陣図屏風」の問題点を指摘した上で、「大坂冬の陣図屏風」と「大坂城図屏風」の資料的価値を考察し、その結果、往時の大坂城天守の外観を描いたものとして最も信頼のおける資料と判断した「大坂城図屏風」に基づいた復元案を提示する。

## 一、大坂城の沿革

秀吉が大坂城[8]を築く以前、その地には石山本願寺があった。

石山本願寺は、明応五年（一四九六）、本願寺八世蓮如が草庵を建てたことに始まるとされている。もとは石山御坊などと呼ばれていたが、天文元年（一五三二）、九世証如の時に総本山であった山科本願寺が六角定頼の軍勢と法華一揆の焼き討ちによって焼失したため、ここに本山が移され石山本願寺と呼ばれるようになったと言う。その後、諸勢力との抗争のなかで堀や土塁が築かれ、証如の頃にはすでに「摂州第一の名城[9]」と呼ばれるほどになっていたが、正確な規模などは明らかになっていない[10]。石山本願寺については、殿舎構成やその平面の復元を行った川上貢[11]・桜井敏雄[12]・松岡利郎氏[13]などの研究、また石山本願寺の成立条件を政治や経済から探り、さらに寺内町の構成などを論じた伊藤毅氏[14]の研究がある。

元亀元年（一五七〇）、織田信長との間に石山合戦が勃発した。石山本願寺は十年もの間信長の攻撃に耐えたが、天正八年（一五八〇）、十一世顕如は、正親町天皇の仲介で信長と和議を結び紀州へと移ったとされる。その後も顕如の子教如は、しばらく抵抗を続けたが同年八月には開城し、その時の混乱で、石山本願寺は焼失してしまった[15]。

信長の没後、秀吉は北の庄で柴田勝家を滅ぼし、信長の後継者としての地位を固める。そして大坂を自らの所領とし、ここを天下統一の拠点とするために築城を開始した。築城は天正十年八月から準備が進められ[16]、九月一日に始められたと考えられている[17]。築城工事は、日々二、三万人、多いときには五万人が動員されるという大規模なものであったとされている[18]。天正十二年八月八日には、秀吉が大坂城へと移っていることから[19]、この頃には秀吉が執務や生活をする本丸御殿なども完成していたと考えられている。天守の完成はそれより後のことで、天正十三年四月に下間頼簾が秀吉に天守を案内されており、これが秀吉による天守案内の最初と考えられることから、岡本良一氏は天守の完成がこれをさかのぼるあまり遠くない時期としている[20]。

この大坂の地は当時、十年にもわたって信長の攻撃に耐えた石山本願寺が所在していたことから、その堅固さは誰もが注目しており、政治・経済・対外交流・軍事の要衝であり城下町の建設に適した場所であったため、天下人の城を築くには最適な場所であったと考えられていた[21]。

大坂城は、宣教師の記録[22]にもあるように信長が築いた安土城を遙かに凌ぐものであり、天守や御殿殿舎など建築物の豪華さや石垣や堀の壮大さは、かってないものであったと考えられる。

秀吉の死後、関ヶ原の戦いで徳川家康は石田三成を破りその地位を確固たるものにした。その後、豊臣氏は一大名に落とされ、大坂城は天下人の城から一大名の城となってしまう。慶長十九年、方広寺鐘銘文事件を契機に大坂冬の陣、さらに翌二十年には、大坂夏の陣が勃発し、大坂城は陥落、炎上した。豊臣家の権力の象徴であったが、築城から三十年余りで灰燼となってしまった。

大坂の陣後、大坂は松平忠明の所領となっている。忠明は

城下町の復興に尽力したとされる。その後大坂は幕府の直轄地となり、西国の諸大名を監視するため新たに城が築かれることになった。城の面積は豊臣時代に比べると五分の一ほどに縮小されたが、石垣などの高さはそれを凌ぐものであった。寛文五年（一六六五）に天守[23]は落雷によって焼失してしまうが、将軍慶喜の大坂城退去の際の混乱で主要な建物が焼失するまで、徳川幕府の権力の象徴であった。

この後、昭和四年（一九二九）大阪市によって天守の復興が開始され、昭和六年に完成している。復興天守は「大坂夏の陣図屏風」を主な資料として設計されたが、徳川時代の天守台に合わせて造られたため、外観は豊臣時代風であるが、規模は徳川時代のものとなっている。この復興天守は、戦後の天守復興ブームの先駆けをなすものであったと言える。

昭和二十八年に城跡が特別史跡に、また大手門や千貫櫓など十三棟が重要文化財の指定を受けている。その後幾度かの修理工事が行われており、平成七年（一九九五）から九年にかけて天守を昭和六年の復興当時の姿に戻す工事が行われた。

また発掘調査も行われており、昭和三十四年の調査では、石垣や堀がすべて徳川時代のものであるということが明らかになった。また地下で石垣を発見するといった成果を挙げた。その後、その石垣が豊臣時代のものと判明したため、徳川大坂城が豊臣大坂城に盛土をして、その上に建てられたということが明らかとなっている。[24] また昭和五十九年の発掘では、本丸東面の石垣が検出されている。最近では、平成十五年に豊臣時代の三の丸の堀が発見されている。堀は広い箇所で二十五メートルもの幅があり、中からは木柵や櫓の部材や金箔瓦等が発掘されるという成果を挙げている。

## 二、「本丸図」の考察

大坂城の本丸図と考えられているものは、「中井家本丸図」・「城塞繹史所収本丸図」[25]・「諸国古城之図所収本丸図」[26]がある。これらの図については、すでに桜井成広氏[27]・宮上茂隆氏・北垣總一郎氏[28]の研究がある。

「城塞繹史所収本丸図」は、宮上氏が指摘しているように「中井家本丸図」と比較すると数度の写し替えを経ていると考えられる。また北垣氏が指摘しているように「諸国古城之図所収本丸図」も「城塞繹史所収本丸図」と同系統と考えられる。したがって本稿の復元には「中井家本丸図」を用いることにした。ここでは、従来の研究をもとにして、それぞれの本丸図の紹介をし、「中井家本丸図」については、制作時期などについて若干の考察を行うことにしたい。

### （一）「城塞繹史所収本丸図」

『城塞繹史』は四百九十七枚の城郭絵図を集録したもので、寛政年間に旗野士郎という人物によって編纂された山鹿流の軍学書と考えられている。原本は米軍の空襲によって焼失し

ており、現在残っているものは、桜井成広氏によって透写、写真撮影されたものである。「中井家本丸図」に比べると書き込みが少なく、建物の平面が異なっている部分がある。また建物は黄色に塗られた部分と無着色の部分がある。

### （二）「諸国古城之図所収本丸図」

『諸国古城之図』は昭和四十八年に広島市立中央図書館浅野文庫の中から発見されたもので、成立年代は十八世紀中期から後期にかけてと推定されている。広島藩主の軍学勉強用に作成された城郭絵図集と考えられている。

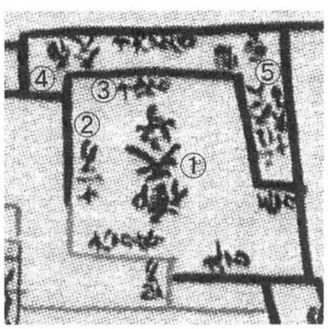
石垣の線は、「中井家本丸図」に比べるとかなり太く描かれており、石垣の長さや高さについての書き込みが少ない。また、一部記された数値が異なっている部分がある。石垣は黒、水堀は紺、建物は黄色と淡緑色で着色されている。「中井家本丸図」と異なった数値が記された部分が「城塞繹史所収本丸図」と一致することから、両図は原図を同じくすると考えられている。

### （三）「中井家本丸図」（図1）

昭和三十五年に日本城郭協会によって徳川幕府の京都大工頭であった中井家から発見されたもので、「大坂御城小指図カ不審ノ所々可相改」と書かれた袋に入っていたものである。ほぼ同一のものが二枚あり、水堀の色や御殿平面などに若干の違いがあるが、いずれも写本と考えられている。二枚の図の石垣の高さや長さ、建物の名称といった書き込みがほとんど一致することから、原図は同じと考えられているが、原図の所在は不明である。

次に、原図の制作時期について触れておく。宮上氏は、御殿平面が濃淡黄色に塗り分けられていることに注目し、これはある時期において完成していた建物とそうでない建物を表していると考え、表御殿のほぼ全体が濃黄色に塗られていること、奥御殿は遠侍や玄関、台所を含む一画しか濃黄色で塗られていないことから、秀吉の御移徙の儀が行われた天正十二年八月七日の段階で完成していたものとそうでないものを表しているとしている。そのため原図の制作時期を天正十二年以前としているが、後世の城絵図における建物の色の塗り分けは、表と奥を区別している場合が少なくなく、宮上氏の指摘は当たらないと考えられる。

また宮上氏は、『中井家系譜』[29]に、中井正清が大坂城に忍び込み本丸図を手に入れたとあることに着目しているが、これは北垣氏が指摘しているように正清と家康との関係を強調




①御天守　④石垣五尺
②十一間　⑤幅三間
③十弐間

図1　「中井家本丸図」天守部分

するために、正清もしくは後代の人物による作為である可能性が高い。[30]

ところで、後述するように「大坂城図屏風」によると、天守台北側の武者走部分には、天守建築において極めて珍しい付庇があったと考えられる。「中井家本丸図」において、北側の武者走の幅や北東側にさらに積み上げた石垣の高さを記しているのは、この図の制作時において、付庇がなかったためと考えられる。また、本丸北側に存した極楽橋を欄干のある通常の橋として描いている。「大坂城図屏風」によると極楽橋は、櫓を載せた唐破風造の廊下橋であったと考えられるが、この廊下橋は、『義演准后日記』によると慶長五年に豊国神社に移築されている。したがって、「大坂城図屏風」に描かれている景観は、慶長五年以前と考えられ、付庇が設けられた正確な年代は分からないものの、遅くとも慶長五年にはあったと考えられる。以上のことから、「中井家本丸図」の制作年代は、慶長五年以降ということはありえず、それ以前の早い時期、すなわち天正年間としても大過ないと考えられる。

## 三、屏風絵の考察

大坂城天守の外観を知る資料としては、「大坂夏の陣図屏風」・「大坂冬の陣図屏風」・「大坂城図屏風」といった屏風絵がある。これまで、古川重春氏や宮上茂隆氏などによって大坂城天守復元案が提示されているが、そのほとんどが「大坂夏の陣図屏風」を根拠に復元したものであって、「大坂冬の陣図屏風」や「大坂城図屏風」を用いた復元はほとんどない。[31] しかし、「大坂夏の陣図屏風」を詳細に検討してみると、建築学的問題点が少なくないことや豊臣時代の大坂城の指図とされている「中井家本丸図」との矛盾点が見られる。

ここでは、「大坂夏の陣図屏風」の問題点を挙げた上で、「大坂冬の陣図屏風」と「大坂城図屏風」の資料的価値を考察することにしたい。

### (一) 屏風絵の概要

**「大坂夏の陣図屏風」**(図2)

この屏風は六曲一双で、大坂夏の陣における最後の決戦の様子を描いたものである。黒田長政が大坂夏の陣後に描かせたもので、遅くとも長政が亡くなる元和九年(一六二三)までには完成していたと考えられている。大坂城は、右隻の左端と左隻の右端、すなわち屏風の中央に描かれている。

天守は五重で入母屋造の基部を持つ望楼型で、南面と西面が描かれている。屋根構造は、まず一重目を南北方向の入母屋造として、二重目は層塔式(寄棟式)に逓減させる。その上の三重目を一重目と同じく南北方向の入母屋造として、さらにその上に四重目と五重目からなる望楼を載せる。また西側には一重目に千鳥破風を二つ、二重目と四重目にもそれぞれ千鳥破風を一つずつ、また五重目には軒唐破風を設けてい

る。妻飾はすべて木連格子として、破風板や長押には金色の金具を打ち付けている。垂木は、塗り籠めず黒漆塗としていて、外壁は真壁造として腰部分を下見板張とし、その上部に窓を開け、戸は突上戸である。最上階の中央間には金色の舞良戸を設け、その両脇間には金色の鷺が描かれている。最上階の周囲には、刎高欄付の廻縁があり、その下部の壁には虎が描かれている。

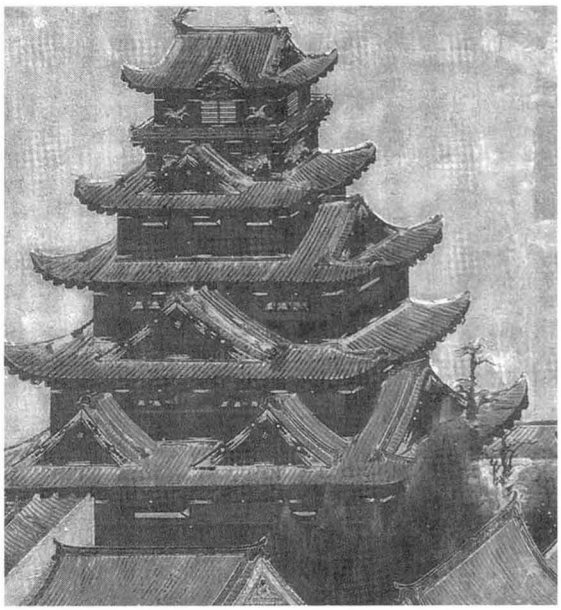


図２　「大坂夏の陣図屏風」天守部分

**「大坂冬の陣図屏風」**（図３）

この屏風は六曲一双で、幕府の奥絵師を勤めた木挽町狩野家に伝来したもので、大坂冬の陣における激戦の様子を描いている。江戸時代に模写されたもので、原図は現存しない。大坂城は、右隻の左側から左隻にかけて描かれていて、天守は左隻の中央上方に配されている。

天守は五重で入母屋造の基部を持つ望楼型で、北面と西面が描かれている。屋根構造は、まず一重目は層塔式に逓減さ

図３　「大坂冬の陣図屏風」天守部分

せ[32]、二重目を東西方向の入母屋造としている。三重目は、二重目と棟の向きを互い違いにして、南北方向の入母屋造として、さらにその上の四重目も三重目と棟の向きを変えた入母屋造として、その上に五重目を載せる[33]。二重目の西側には唐破風の出窓、一重目の北側には付庇を設けている。

外壁は、各階とも柱や長押を見せる真壁造とする。「大坂冬の陣図屏風」には、色指定の書き込みが随所に見られるが、四重目の右側に「柱内コシ板　スミノク　タルキ同」（傍点、著者）という書き込みがある。このことから、岡山城や広島城天守といった後世の天守のように柱を隠すように下見板を張る大壁造ではなく、柱内を腰板、「墨ノク」（墨の具）すなわち柱間だけに薄黒い板を張った真壁造として描こうとしている。また垂木は、上記の書き込みに「同」とあることから黒塗で、塗り籠めていなかったことを示す。妻飾は、すべて木連格子で、最上階には刎高欄付の廻縁を設ける。また三階の外壁下に腰組のようなものを描いているが、これは書き誤りであろう。

**「大坂城図屏風」**（図4）

この屏風は、大坂冬の陣以前に描かれたもので、大坂城天守を描いたものとしては最も古いものと考えられている。当初は六曲一双の屏風であったらしいが、現状は、図柄が連続しない二扇分の残欠を二曲一隻屏風に仕立てたもので、もとは大坂城とその城下を描いたものと考えられている。

天守の北側の極楽橋と考えられる箇所に日本建築には珍しい望楼を載せた唐破風造の廊下橋を描いている[34]。『義演准后日記』慶長五年（一六〇〇）五月十二日条[35]によると「大坂（城）極楽橋」を豊国明神（豊国神社）へ移築して二階門としたとある。この二階門は「廿間」と長大で「中間ノ二階」がほかの部分より高かったと言うので、この屏風に描かれているような望楼を載せた唐破風造の廊下橋を指すと考えられる。また宣教師の記録[36]にも「（太閤は）また城の壕に巨大な橋が架

図4　「大坂城図屏風」天守部分

けられることを望んだが、それによって既述の政庁への通路とし、また（橋に）鍍金した屋根を設け、橋の中央に平屋造りの二基の小櫓を突出させた。」とあり、「大坂城図屏風」の描写の正確さの証左となる。[37]

天守は、五重で入母屋造の基部を持つ望楼型で、北面と西面が描かれている。一階と二階は北面を除いて同大として、二重目を東西方向の入母屋造とする。三重目は二重目と棟の向きを互い違いにして南北方向の入母屋造として、その上に入母屋造の四重目を三重目とは棟の向きを変えて載せる。そしてその上に五重目を載せる。北側には「大坂冬の陣図屏風」と同様に付庇を設けている。外壁は、柱や長押を見せる真壁造として、柱間には、桐紋と菊紋（一重目）、牡丹唐草（二重目）、桐紋と菊紋（三重目）、巴紋（四重目）、桐紋と菊紋（五重目）を黒地に金色で描いている。また妻飾は、木連格子ではなく、金色の牡丹唐草を描いている。最上階には刎高欄付の廻縁を設け、各重の軒丸瓦は金色に描いている。また垂木は塗り籠めず黒色としている。

### （二）「大坂夏の陣図屏風」の問題点

まず、二重目を層塔式に逓減させているが、このように中間層にのみ層塔式逓減を用いた天守は例がなく、本来は同大であったものの描き誤りと考えられる。後世の望楼型天守を見てみると、岡山城天守や広島城天守のように一階と二階を同大として二重目を入母屋造の屋根とするものと、熊本城天守のように一重目を入母屋造の屋根として二階と三階を同大とするものがある。「大坂夏の陣図屏風」に描かれた天守は一重目を入母屋造の屋根としているので、仮にそれが正しいとした場合には、二階と三階も熊本城天守と同じように同大とするべきであろう。

また「中井家本丸図」によると大坂城天守の一階平面は、東西十二間に南北十一間で、東西方向が長辺となることが明らかである。日本建築では、長辺を平側とするのが普通である。すなわち大坂城天守では、東西方向が平、南北方向が妻となるはずであるが、この屏風に描かれた天守ではそれが逆になっている。

また一重目の入母屋造の大棟が二重目の屋根の下に納まる形状に描かれているが、一階平面の妻側は十一間と長大で、ここに入母屋破風を設けると、破風の上部は二重目の屋根を突き抜けるはずである。[38] それを二重目の屋根の下に納めようとすると、実際には二階の壁面が二倍の階高になってしまい、天守の造形として成り立たない。すなわち作図上のごまかしがあって、文字通りの絵空事と言える。

以上のように、「大坂夏の陣図屏風」に描かれた天守は、全体の趣きはともかく、天守の構造形式については信頼することができない。この屏風は、大坂夏の陣によって天守が焼失した後に描かれたもので、絵師の推測や伝聞などによって描かれた可能性が高い。前述のような看過できない問題点があることを考え合わせてみても、大坂城天守の姿を正確に描

いている可能性はないと言える。

### (三)「大坂冬の陣図屏風」と「大坂城図屏風」の比較

「大坂冬の陣図屏風」と「大坂城図屏風」に描かれた天守は、ともに二重目を東西方向の入母屋造、その上の三重目を南北方向の入母屋造としている。また一重目の北側には、天守建築には珍しい付庇[39]が設けられていて、基本的構造は一致していると言える。

その一方で、相違点もいくつか見られる。まず、「大坂冬の陣図屏風」では付庇と一階の地盤高が同じになっているのに対し、「大坂城図屏風」では付庇の土台の線を一階の隅から斜めに下げて引いている。「中井家本丸図」によると、この付庇が設けられていたと考えられる武者走は、天守本体から五尺下がっていることが分かる[40]。「大坂城図屏風」では、付庇と一階の地盤高が違うということを付庇の土台の線を斜めに引くことで表したと考えられる。また「大坂冬の陣図屏風」で一重目を層塔式に逓減させているが、そのような望楼型天守は例がないことから、「大坂冬の陣図屏風」が誤っていると言える。したがって、「大坂冬の陣図屏風」の天守は「大坂城図屏風」の天守を直接または間接に模倣して描いたと考えられる[41]。

以上のことから、「大坂城図屏風」は、「大坂夏の陣図屏風」・「大坂冬の陣図屏風」よりも制作年代が古く、現在知られている大坂城を描いた屏風絵の中で最も早い時期に制作されたものと言うことができる。

これまで大坂城天守を復元する際の一級資料とされてきた「大坂夏の陣図屏風」は、信頼性が乏しいことを明らかとした。それに対し「大坂城図屏風」の天守は、構造的な問題がなく、北面の付庇という天守としては極めて特異な点を描いていること、「中井家本丸図」とその点において完全に一致することなどから、実際の天守を正しく描写しているものと考えられる。したがって本稿では、「大坂城図屏風」を復元の基本資料とする。「大坂冬の陣図屏風」については、「大坂城図屏風」に類似し、写し崩れの多いものであると考えられるため、参考にはならない。

## 四、復元考察

本稿では、「大坂城図屏風」、「中井家本丸図」および文献史料[42]をもとにして、大坂城天守立面復元案を提示する。なお、天守内部の部屋割などについては資料が全くなく、判然としないので省略させていただく。

### (一) 宮上復元案の問題点

先述したように宮上氏が主要な復元資料とした「大坂夏の陣図屏風」について資料批判を行った結果、この屏風絵は大坂城天守焼失後に描かれたもので、天守も絵師の推測や伝聞によって描かれた可能性が高いことを指摘しておいた。した

がって宮上氏の復元案は、その資料的根拠を失うことになる。ここではそれに付け加えて、建築的問題点などを指摘しておく。なお古川氏の復元案は、現存天守台が徳川時代のものと判明しておらず、なおかつ「中井家本丸図」も発見される以前に作られたため、徳川時代の天守台の上に秀吉時代の天守を復元するという基本的な誤りがある。したがって本稿では取り上げない。

まず、宮上案では、二重目の屋根を層塔型天守のように寄棟式に納めているが、中間層に層塔式逓減を用いた望楼型天守は、現在知られている例がない。また二重目の屋根の隅降棟が、三階の外壁面の角と一致していない。これは二階と三階で東西と南北の逓減の幅が異なるためである。慶長十六年（一六一一）築造の松江城天守の三重目の屋根に同様の例があるが、その上の最上階の廻縁の縁下に当たり、当該廻縁が室内に取り込まれているとはいえ、意匠的に天守本体の外壁には相当しないものなので、寄棟式の類例として同等には扱えない。[43] また一重目の屋根を比翼入母屋造としているが、これは「大坂夏の陣図屏風」の描写と異なっている。すでに述べたように、一重目に入母屋造の屋根を設けようとすると、破風頂部が二重目の屋根を突き抜けてしまうことから高さの低い比翼入母屋造としたのであろうが、自ら正確と判断した資料を無視していると言える。また軒裏を白漆喰の塗籠としている点も同様に屏風の描写と異なっている。

### （二）天守台

「中井家本丸図」によると大坂城の天守台は、本丸上段石垣天端より北東側で幅三間の武者走を控え、高さ五尺の石垣をさらに積み上げており、東西十二間に南北十一間で、南辺が北辺より長い台形である。

「中井家本丸図」によると、天守台の南辺の西寄りと西辺の南寄り部分は、朱色で線が引かれている。[44]「中井家本丸図」において朱色の線は、他の箇所における墨線と朱線の区別からすると塀を表していると判断できる。しかし、天守の南西隅の一部分にのみ塀が廻らされていたとは考えがたい。姫路城天守は、北側と西側の一部のみ低い石垣上に建ち、北西隅の石垣を欠いている。すなわち、天守穴蔵の外壁が露呈している。したがって、大坂城天守においても姫路城天守と同様に低い石垣上に建っていた可能性が考えられるので、本稿の復元案では西南隅が低い石垣上に建っていたとしておく。[45] 石垣の高さは、北東側で積み上げられた石垣に準拠して五尺としておく。当該部分の高石垣を欠くことで、穴蔵内の採光に配慮したためと考えられる。[46]

また現存する安土城の天主台を見てみると、東南側に穴蔵の入口があったことが分かる。また後世の天守において、犬山城天守や姫路城天守、名古屋城天守など穴蔵を持つ天守は、一般的に天守台に穴蔵への入口がある。したがって、大坂城においても天守台に穴蔵への入口があったはずで、「中井家本丸図」における天守台の朱線の部分がそれに当たるものと

考えられる。

### (三) 階数

結論を先に示すなら、大坂城天守は地上七階地下二階の九階建てであったと考えられる。大坂城天守の階数については、七階とする『天正記』、八階とする『兼見卿記』・『フロイス日本史』・「吉川経安の消息」、九階とする「大友宗麟の書簡」・『土佐物語』など諸説がある。[47]

「大友宗麟の書簡」に「一階ノ下ハ皆御蔵ニ而候（中略）蔵上下ニアリ」とあることから地下は二階あったと考えられる。「中井家本丸図」によって復元される天守台は、すでに宮上氏が指摘しているように本丸地表面からの高さが四間（六尺五寸で換算して二十六尺）であったと考えられるので、その高さからすると、地下は二階であったと考えられる。[48] 地下二階の類例には犬山城天守がある。

「大坂城図屏風」によると天守は外観五重と推察されるが、岡山城天守や松江城天守など五重や四重の望楼型天守の例からすると、三重目の入母屋破風内には屋根裏階があったと考えられる。また、最上階には廻縁があり、『フロイス日本史』などによるとそれは外に出られるものと言う。そのため最上階室内の床高を上げ、廻縁とほとんど同高にするために、四重目の屋根内にも屋根裏階（六階）が必然的にできることになる。最上階に外に出られる廻縁を持つ高知城天守の例からすると、その屋根裏階の階高はかなり低かったと考えられ、『フロイス日本史』に記されている、天守に登り降りする際に、低い桁で頭を打たぬようにとある数箇所の一つと考えられ、[49]「大坂城図屏風」において四重目の屋根の上に少しだけ見えている壁面が、これに相当すると考えられる。したがって、大坂城天守の階数は、地上が二つの屋根裏階を合わせて五重七階となり、地下の二階を含めると全部で九階建てということになる。八階と記した史料は、六階が狭い屋根裏階であって階高も低かったので階数に数えなかった可能性が指摘できる。また七階とする『天正記』は、地下の二階分を数えず、地上の階だけを記したと考えられ、各史料間における矛盾はないと考えられる。

### (四) 平面と屋根形式

「中井家本丸図」によって、一階平面は東西十二間に南北十一間ということが明らかである。また北側の幅三間の武者走部分には、「大坂城図屏風」から城郭建築には珍しい付庇の存在が推定される。さらに東南隅には付櫓が接続していたと考えられ、『フロイス日本史』によればここに入口があったと推察される。[50] 天守本体ではなく付櫓に正式な入口がある天守の例としては、岡山城や彦根城、松江城が挙げられる。

「大坂城図屏風」によると二階平面は、一階と同大なので、二階も東西十二間に南北十一間と考えられる。一階と二階が同大である五重の天守は一般的であって、岡山城天守や広島城天守・姫路城天守・名古屋城天守などがある。

屋根は「大坂城図屏風」から一重目が腰屋根、二重目が棟の向きを東西方向にする入母屋造と考えられ、その上の三重目の屋根は、棟の向きを互い違いにして南北方向の入母屋造と考えられる。次に四重目の屋根は、棟を東西方向にした入母屋造、また五重目（最上重）は棟を南北方向にした入母屋造と考えられる。四重目を入母屋造とする五重の天守は例がなく、千鳥破風の描き誤りとも考えられるが、入母屋造としても構造上に問題はないので、本稿の復元案では資料に準拠して入母屋造としておいた。最上重については、後世の天守が望楼型や層塔型といった天守の形式や建築年代の新旧に関係なく入母屋造としているので、当然に入母屋造であったと断定できる。

三階平面の規模を知る資料はない。したがって、後世の天守などを参考にして推察するしかない。三階平面は、その上に架かる入母屋造の棟の向きが南北方向なので、一・二階とは逆に南北が長辺となる。望楼型天守において入母屋造の屋根は不整形な平面に見切りをつけ、その上に載る階を正方形に近づけるためのものと考えられる。したがって、二階平面の長辺と短辺の差が一間であるので、三階平面においてその差がそれ以上に広がることはないと思われる。そうすると、三階平面の規模は、東西九間に南北十間、東西八間に南北九間、東西七間に南北八間などいくつかの可能性が考えられる。

まず、東西七間に南北八間とすると、二階からの逓減が東西で五間、南北で四間となり、急に小さくなってしまい見映えがいいとは言いがたい。また南北を四間も逓減させると、二重目屋根が少なくとも一間半も勾配によって登ってくるので、三階の大部分が二重目の屋根に埋没してしまうため、採光や防備の面で実現しがたい。次に東西九間に南北十間とすると、東西側の三重目の軒先が二重目の入母屋造屋根の掛巴に接するほどになってしまい、天守の造形上、首肯しがたい。したがって三階平面は、東西八間に南北九間とするのが妥当と考えられる。東西八間に南北九間とすると三重目の軒先が二重目の入母屋造屋根の降棟に接するほどになり、上の重からの雨水が流れなくなってしまう。そのため、姫路城天守二重目の入母屋造屋根の例にしたがって、降棟を内側に置き、なおかつ途中で終わらせておいた。

次に四階は、安土城・岡山城・松江城などの例からして、二重目大入母屋屋根と三重目の入母屋屋根との屋根裏階と考えられる。その上の五階は、すでに述べたように四重目が棟を東西方向にした入母屋造の屋根であるため、東西が長辺、南北が短辺となる。三重目屋根内に五階が埋没してしまわないように考慮すると、東西六間に南北五間と考えられる。

最上階（七階）の規模は、岡山城や広島城など関ヶ原以前の天守の例からして、三間四方であったと考えられる。安土城天主も『信長公記』によると三間四方であったと考えられ、大坂城天守もその規模を踏襲していたと推察される。また最上階の下には、前述したように屋根裏階（六階）ができる。規模は最上階と同様に三間四方と考えられる。なお、最上階

には、「大坂城図屏風」と宣教師の記録[51]から高欄付の廻縁があったことが確認できる。

屋根葺材は「大坂城図屏風」や宣教師の記録から瓦葺で、瓦当に金箔を押した金箔瓦であったと考えられる。また軒先は「大坂城図屏風」で黒色に描かれているので塗籠とはせずに黒漆塗としていたと考えられる。

### (五) 外壁・窓

「大坂城図屏風」によると大坂城天守の外壁はすべての階で柱や長押などの木部を見せる真壁造であったと考えられる。

また「大坂城図屏風」では一階外壁に桐紋と菊紋、二階に牡丹唐草、三階に桐紋と菊紋、五階に巴紋、六階に牡丹唐草、そして最上階に桐紋と菊紋を描く。さらに二重目・三重目・四重目・五重目の入母屋破風の妻飾部分には牡丹唐草を描いている。

ところで、秀吉が醍醐寺に建立した三宝院唐門は、扉に巨大な桐紋と菊紋の浮き彫りを取り付けている[52]。また宣教師の記録に、「羽目板には種々の彫刻があり、鍍金された板の巨大な量で照り輝いている[53]。」という記述がある。これは天守について記したものではないが、大坂城内には羽目板すなわち壁板に彫刻を施した建物があったことを示している。したがって、「大坂城図屏風」に描かれた桐紋・菊紋・牡丹唐草などの飾りは、壁画ではなく、彫刻であった可能性が高い。黒漆塗をした厚い板を柱間に嵌め、そこに金箔を押した彫刻が施されていたと考えられる[54]。また、後述するように入母屋破風の妻飾は、後世の天守に見られる木連格子や塗籠とするのではなく、寺社建築のような二重虹梁大瓶束式であったと考えられる。さらに宝厳寺唐門などの例からして虹梁や大瓶束の間にも牡丹唐草の彫刻が充満していたと考えられる。

次に窓について述べておく。「大坂城図屏風」において柱間はすべて彫刻を描いていて、窓は全く描かれていないが、『フロイス日本史』に「そして途中では閉ざされていた戸や窓を自分の手で開いて行った[55]。」とあることからして、窓はあったはずである。慶長十三年の姫路城天守、同十七年の名古屋城天守は半間幅の格子窓を一対にして並べて土戸を引戸とする。しかし、それらより年代の古い慶長二年の岡山城天守や同三年の広島城天守などでは一間幅の格子窓とし、戸は突上戸であるので、大坂城も同様であったと考えられる。

最上階には、「大坂城図屏風」では、絵が剥落しているため判断することができないが、『フロイス日本史』などの史料により廻縁に出るための戸口があったことが分かる。「大坂城図屏風」の天守を模倣したと考えられる「大坂冬の陣図屏風」は、戸口そのものが略されて描かれていないので、本稿では、とりあえず「大坂夏の陣図屏風」にしたがって、舞良戸としておくが、諸折桟唐戸であった可能性もある。

### (六) 破風・妻飾

後世の天守を見てみると、破風の妻飾は、木連格子・塗籠・

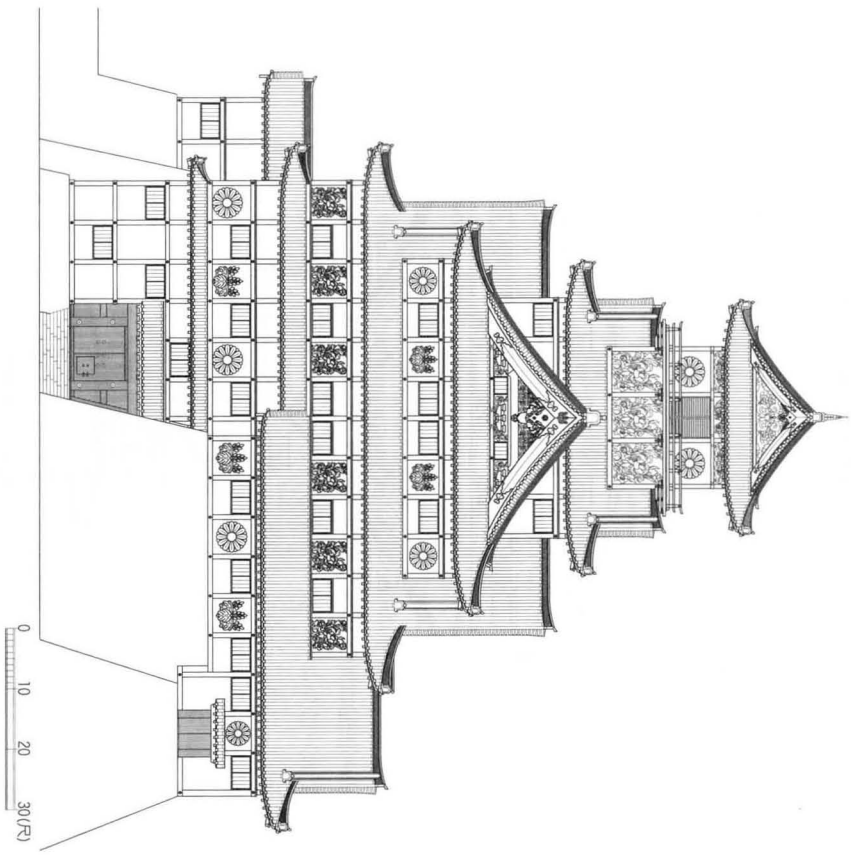



図5　大坂城天守復元南立面図

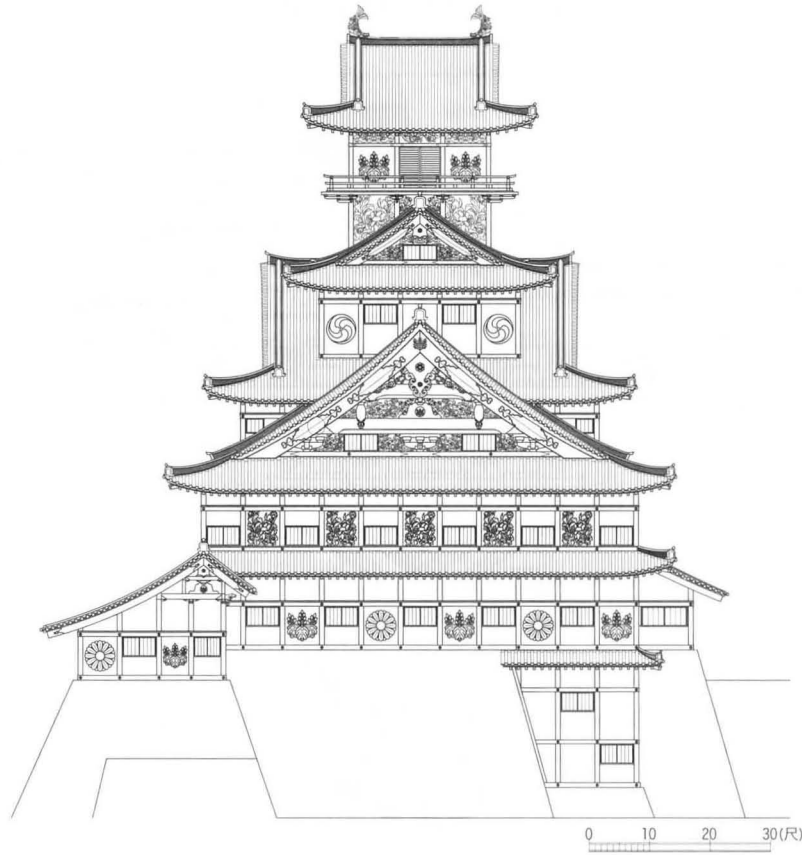



図6　大坂城天守復元西立面図

虹梁豕扠首式などがある。「大坂城図屏風」によると各重の入母屋破風の妻飾には牡丹唐草が描かれているので、大坂城天守の妻飾は後世の天守に多用された木連格子や塗籠ではなかったと考えられる。しかし、彫刻のみを充填した妻飾は小規模な社寺を除いて実例がないので、描写上の省略や変形があるものと考えられる。彫刻の描写から木連格子や塗籠ではないとすると、虹梁豕扠首式や虹梁蟇股式や虹梁大瓶束式などを主構造とし、その隙間に彫刻を充填していたものと想定される。

ところで、泉穴師神社本殿（慶長七年、泉大津市）・片埜神社本殿（慶長七年、枚方市）・積川神社本殿（慶長八年、岸和田市）・与杼神社本殿（慶長十二年、昭和五十年焼失、京都市）・兵主神社本殿（慶長年間、岸和田市）はいずれも豊臣秀頼によって慶長年間に建立されたものであるが、妻飾はすべて二重虹梁大瓶束式となっている。大坂城天守も同様に虹梁大瓶束式であったと想定した場合、「大坂城図屏風」とは相違するが、虹梁大瓶束の隙間は彫刻が充填されていたとすれば、彫刻の描写だけで手狭となってしまい虹梁大瓶束の描写を省略したものとしても大過ない。したがって、規模の大きな二重目は二重虹梁大瓶束式、やや小さい三重目は虹梁大瓶束式と考えられる。小さな四重目と五重目は、「大坂城図屏風」の描写にとりあえず準拠して彫刻を充満させておいた。また、「大坂城図屏風」から入母屋破風には、縁を金色でかたどった懸魚と破風板の飾り金具が復元される。

以上の考察により、大坂城天守は図5・6のように復元される。

## 五、屋根形式についての考察

復元図で示したように、大坂城天守は、一重目が腰屋根、二重目が棟を東西方向にした入母屋造の屋根、三重目が棟の向きを南北方向に変えた入母屋造の屋根、さらに四重目は棟の向きを東西方向にした入母屋造の屋根、そして最上重は棟の向きを南北にした入母屋造の屋根というように、二重目から最上重は、棟の向きを互い違いにした入母屋造が積み重なった形であったと考えられる。

後世の天守を見てみると、岡山城天守、萩城天守、松江城天守などのように二重目屋根上に巨大な入母屋造の出窓を設けた例があるが、これらは大坂城天守における三重目の入母屋造の屋根をやや小振りにして出窓に変えただけで、外観の印象は二重目と三重目の入母屋造の屋根を積み重ねた大坂城天守と同様と言える。さらに五重層塔型天守であった会津若松城の二重目の入母屋造の出窓、三重望楼型天守である彦根城天守の一重目平側屋根上の入母屋破風、高島城天守の一重目屋根上の入母屋造の出窓、三重層塔型天守である和歌山城天守一重目屋根上の入母屋造の出窓も同様であろう。すなわち大坂城天守の入母屋造を互い違いに積み重ねるという形式は、出窓に形を変えて後世の天守に幅広く踏襲されたと考え

られる。[56]

このように入母屋造の屋根を棟の向きを変えて積み重ねると、四方に入母屋破風を見せることになり、千鳥破風といった飾り破風を設けなくても装飾性に富んだ外観を造り出すことができる。現に「大坂城図屏風」には一つも千鳥破風が描かれておらず、また岡山城天守や松江城天守のような年代の古い天守にも千鳥破風は全くない。ただし、入母屋造屋根を積み重ねることは、構造上に問題がないとはいえ、一階の不整形な平面を見切るためには一重目か二重目だけに応用すればよいことであって、いくつも積み重ねる必要はない。また屋根を入母屋造とすると屋根裏階ができやすくなってしまい、そのため岡山城や萩城など後世の天守では入母屋造の屋根を入母屋破風付の出窓に変えたと推察される。

なお三重目を寄棟式に納める広島城天守においても、三重目の四方に設けられた巨大な千鳥破風は入母屋造の屋根を千鳥破風に置き換えたものと見ることができ、大坂城天守の影響を受けていたと言えよう。

## 六、大坂城天守の特色

本稿では、秀吉が築いた大坂城天守について、主要な先行研究である宮上氏の復元案の問題点を挙げ、復元資料との矛盾点や建築学的問題点などを指摘しておいた。また、これまであまり注目されていなかった「大坂城図屏風」が復元資料となることを指摘し、それを主要な資料として復元考察を行った。

本稿で復元した大坂城天守は、「大坂城図屏風」を主な復元資料とした初めてのものである。本稿のまとめとしてその概要を以下に簡略に述べておく。外観五重で内部は地上七階地下二階で、一階と二階を同大として、二重目の屋根を入母屋造とする。その上の三重目は棟の向きを二重目とは互い違いにした入母屋造で、その上にまた棟の向きを変えた入母屋造の四重目が載る。五重目（最上重）はまた棟の向きを変えた入母屋造で、一重目を除く各重で棟の向きを互い違いにした入母屋造が積み重なる構造と考えられる。そして、天守に多用された千鳥破風は、大坂城にはなかったものと考えられる。また、天守の北側には、城郭建築では極めて珍しい付庇の存在が推定される。またすべての階が柱を見せる真壁造で、その柱間に板を落込んだ板壁と考えられる。さらにその板壁には、金色で塗られた彫刻が嵌められていたと考えられる。

まず入母屋造の屋根を積み重ねた外観は、岡山城や萩城といった後世の天守において、入母屋造の出窓に形を変えて受け継がれたと考えられる。また、広島城天守では入母屋破風を千鳥破風に置き換えたものと考えられ、千鳥破風が天守に多用される遠因になったとも考えられる。さらに秀吉が大坂城天守を築くに際して規範としたと思われる安土城天主も入母屋造の屋根を積み重ねていたと推察され、大坂城天守は、その形式を受け継いでいた可能性がある。したがって、大坂

城天守は、天守の屋根形式の発展経過を考察する上で原初的な事例となるものである。また板壁の真壁造としているのは、天守が格式の高い建物と考えられていたためと思われる。その後、秀吉が築いた聚楽第や肥前名護屋城、および傘下の大名の天守である岡山城や広島城は、土壁の大壁造として、明らかに格を落としている。それは、この頃には天守が建物として書院造建築の格式を必要としなくなったことを示している。それでも聚楽第・肥前名護屋城・岡山城・広島城の最上階は、真壁造となっており、大坂城の形式を受け継いでいたと考えられ、大坂城は先行する安土城天主や後世の天守との関連を考察する上で、重要と考えられる。

**註**

(1) 『日本年報』一五八五年十月一日付、長崎発、パードレ・ルイス・フロイスよりイエズス会総会長に贈りし書翰の数節（村上直次郎訳、柳谷武夫編『イエズス会日本年報』上・下、雄松堂書店、昭和四十四年、以下、本稿では本書を用いた）
『フロイス日本史』豊臣秀吉編第四章（第二部六十六章）、大坂城と新市街の建設について（松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』四・五　五畿内編Ⅱ・Ⅲ、中央公論社、昭和五十三年、以下、本稿では本書を用いた）
『フロイス日本史』豊臣秀吉編第八章（第二部七十四章）、関白の権力、ならびに彼が大坂城で行ったことについて

(2) 中井正知氏蔵、『大坂城』（日本名城集成、小学館、昭和六十年）所収

(3) 大阪城天守閣蔵、『大坂城』（日本名城集成、小学館、昭和六十年）所収

(4) 東京国立博物館蔵、『大坂城』（日本名城集成、小学館、昭和六十年）所収

(5) 大阪城天守閣蔵、『大坂城』（日本名城集成、小学館、昭和六十年）所収

(6) 古川重春『錦城復興記』（ナニワ書院、昭和六年）、『日本城郭考』（巧人社書店、昭和十一年）

(7) 宮上茂隆「豊臣秀吉築造大坂城の復原的研究」（『建築史研究』三十七号、昭和四十二年）、『大坂城』（日本名城集成、小学館、昭和六十年）

(8) 大坂城天守は、秀吉築造のほかに、徳川氏が築造したものと昭和に復興したものがある。本稿では、主として秀吉築造の天守を取り扱うので、これを大坂城天守と記し、他の二つを徳川大坂城天守、復興大阪城天守閣と記すことにする。

(9) 『足利季世記』（『改定史籍集覧』第十三冊　別記類第二、近藤活版所、明治三十五年所収）

(10) 『信長公記』巻十三「抑も大坂は凡そ日本一の境地也。（中略）加賀国より城作を召寄、方八町に相構。」とあり、『宇野主水日記』天正十三年五月三日条「秀吉自身ニ御出有テ縄打ヲサセラルゝ也、中島天満宮ノ会所ヲ限リテ、東ノ河際マテ七丁、北ヘ五町也。屋敷入次第ニ、長柄ノ橋ニテ可被仰渡云々。先以当分ハ七町ト五町也。元ノ大坂ノ寺内ヨリモ殊ノ外広ナリ。」とあるなど一通りではない。

(11) 川上貢『日本中世住宅の研究』（墨水書房、昭和四十二年）

(12) 桜井敏雄「浄土真宗寺院本堂の成立過程」（上）（下）（『仏教芸術』一〇二・一〇四号、昭和五十年）

(13) 松岡利郎『大坂城の歴史と構造』（名著出版、昭和六十三年）

(14) 伊藤毅「摂津石山本願寺　寺内町の構成」（『建築史学』第

三号、昭和五十九年）

(15)『信長公記』巻十三、天正八年八月二日条（奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』角川書店、昭和四十四年）

(16)「石本己雄氏所蔵文書」（『大日本史料』第十一編之五、史料編纂所、昭和九年所収）

普請石持付而掟

石持事書付雖在之、とり次第たるべし、

但、よせ候て、奉行を付置候、石ハ取間敷事、

一宿事在々を取候はゝ、石のとり場遠候條、其石場に野陣をはり候歟、又ハ大坂ニ宿在之衆は、面々宿より被出候共、其身覺悟次第たるへし事、

一いしもち候て歸候者は、かたより候て可通、大石おもき石ニはかろき石かたよるへき事、

一けんくわ口論於在之者、曲事たるへし、

但、一方有堪忍、筑前守ニ於被言上者、雑言仕候者、くせとたるへき事、

一下々者百姓にたいし、不謂族申懸候はゝ、其者可為曲事候條、右悴者可有成敗處、あはれみをいたし、用捨於在者、科人之事は不及申、其主人まて可為越度事、

右條々定置所如件、

天正十一年八月廿八日　　筑前守（花押）

前野将右衛門尉殿

「河路佐満太氏所蔵文書」（同）

諸職人之事、御免除以御目録仰出候、於大坂御普請御用可被仰付候條、可其心得候、向後別之役儀不可在之候、恐々謹言、

浅野彌兵衛尉

長吉

八月七日

近江國

諸職人中

(17)『兼見卿記』天正十四年九月一日条（『大日本史料』第十一編之五、史料編纂所、昭和九年所収）

自今日大坂普請之由了、河内路罷通、里々山々、石ヲ取人足奉行人等數千人不知數

(18)『日本年報』一五八四年一月二日（天正十二年十一月三十日）

付、パードレ・ルイス・フロイスよりイエズス会総会長に贈りたるもの

而して最初は二、三万人をもって工事を始めたが、竣功を急ぐので、遠方の諸侯に、自ら来るか、また己に代わってその子をして家臣を引率して建築に従事せしむることを命じた。（同地より来た者の言ふところによれば）今は月々工事に従事する者は五万人に近い。また他の諸国の領主達には、その城の周囲に大なる邸宅を建築することを命じたため、一人のパードレが同地より通信するところによれば、諸人皆彼を喜ばせんと欲して少しも彼の命令に背かず、約四十日の間に七千の家が建った。

(19)『顕如上人貝塚御座所日記』天正十二年八月八日条（『石山本願寺日記』下巻、清文堂、昭和四十一年所収）

一　八日、大坂新造へ筑州移徙云々

(20)岡本良一『大坂城』（岩波書店、昭和四十五年）

(21)『柴田退治記』（『続群書類従』第貳拾輯下、続群書類従完成会、大正十二年所収）

彼地五畿内中央而、東大和、西摂津、南和泉、北山城、四方廣大而中歸然山岳也、廻籠大河淀川之末大和川流合、其水即入海、大船小舟日々着岸事、不知幾千万艘、平安城十余理、南方平陸而天王寺、住吉、堺津三里余、皆建續町店屋辻小路、

為大坂山下也、以五畿内為外構

(22) 註（1）参照

(23) 徳川大坂城天守については、松岡利郎氏の復元案がある。また近年、松島悠氏によって新たな復元案（「よみがえる名古屋城」、学習研究社、平成十八年）が提示されている。

(24) 宮上氏論文註（7）参照

(25) 戦災焼失したが、桜井成広氏によって写真撮影、および透写したものが残る。

(26) 広島市立中央図書館蔵、浅野文庫

(27) 桜井成広『豊臣秀吉の居城』大阪城編（日本城郭資料館出版会、昭和四十五年）

(28) 北垣總一郎「豊臣時代大坂城「本丸図」と「真田丸」について」（『大坂城の諸研究』日本城郭叢書8、名著出版、昭和五十七年）所収

(29) 城戸久解題『中井家系譜』中井正清条

一、同年大和守御隠密ニ而大坂城中江被遣絵図等相確認申候

(30) 北垣氏論文註(28)参照

(31) 「大坂冬の陣図屏風」をもとに復元したものには、鷺原正義案（三浦正幸『城の鑑賞基礎知識』、至文堂、平成七年所収）がある。

(32) 望楼型天守で、初重に層塔式逓減を用いた例はない。これは後述するが、粉本から写した際の描き誤りで、一階と二階は同大であったと考えられる。

(33) このように四つの入母屋造を積み重ねた天守は、実例が知られていないが、構造上は何の問題もない。

(34) 平成十八年にオーストリアで発見された、豊臣時代の大坂城を描いたと考えられる屏風にも唐破風造の廊下橋が描かれている。この屏風については、高橋隆博編『新発見　豊臣期大坂図屏風』（清文堂、平成二十二年）を参照されたい。

(35) 『義演准后日記』慶長五年五月十二日条（『義演准后日記』第二、続群書類従完成会、昭和五十九年）

次豊國明神ノ鳥井ノ西ニ、廿間斗ノ二階門建立、大坂極楽橋ヲ被引了、二階ノ垂木少々出来了、中間ノ二階ハ猶自余ヨリモ高キ也、柱以下悉蒔繪也、下ノ重圓柱悉黒漆也、組物彩色也、結構篤目

(36) 一五九六年十二月二十八日付、長崎発信、ルイス・フロイス師の年報補遺（松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期第二巻、同朋舎出版、昭和六十二年）所収

(37) なおこの唐破風造の部分は、その後豊国神社から竹生島宝厳寺に移築された国宝の唐門（極楽門）である可能性がある。詳しくは、紙幅の都合上別稿に譲る。

(38) 古川案やそれをもとにした復興大阪城天守閣の屋根のようになる。

(39) 類例は備後福山城天守と熊本城小天守しかない。

(40) 「中井家本丸図」によると北東側に積み上げられた石垣については、「石垣五尺」という書き込みがある。

(41) 「大坂冬の陣図屏風」のほかにも「京・大坂図屏風」（大阪歴史博物館蔵）に描かれた大坂城天守は、色彩を除けば屋根形式などほとんど同じもので、「大坂城図屏風」を模倣した可能性が考えられる。

(42) 九州の戦国大名である大友宗麟が大坂城を訪れた際に見聞したことを家臣に送った書簡に記している。またルイス・フロイスも同様に大坂城を訪れた際の記録を残している。このほかに、天守の階数のみを記した史料（詳しくは後述）がいくつかある。いずれにしても、大坂城天守について詳細に記

したものではないが、内部の様子や階数などを推測することができる。

(43) 高知城の三重目の屋根も同様である。なお姫路城天守の最上階も松江城天守と同様に廻縁を取り込んだ形式である。しかし、松江城では入側の外側に手摺を設け、さらにその外側に板戸を建て、この入側部分がかつては廻縁であったことを如実に示しているのに対して、姫路城では一・二階平面などと同様の入側として扱われている。そのため姫路城天守の四重目の屋根は、振隅にすることで、強引に最上階の隅に納めている。

(44) 二枚の「中井家本丸図」のうち一方は、南辺のみを朱線としている。しかし、後述するように、この朱線が低い石垣を表している場合、南辺のみに石垣があったことになるが、そうすると西南隅が納まらないと考えられる。したがって、この図では、書き写す際に誤って西辺を朱線にするのを忘れていたと考えられる。

(45) 宮上氏はこの朱線が木部を表していると考え、当該部分のみ天守の木部が直接本丸地表面に建っていたとしているが、その可能性も否定できない。

(46) この石垣の高さが記されていないのは、原図から書写した際に写し忘れたか、もとから記されていなかったためと考えられる。「中井家本丸図」では、すべての石垣の高さが記されているわけではない。

(47) 『天正記』天正十六年九月十一日条（『毛利史料集』第二期戦国史料叢書九、人物往来社、昭和四十一年所収）
此時、天守を見せ参らせられ候。関白様御案内成され候。（中略）金の間、銭の間、御宝物の間、御小袖の間、御武具の間、以上七重也。（傍点著者、以下同じ）
『フロイス日本史』大坂城と新市街の建設について
八層からなり、（最）上層にはそれを外から取り囲む廻廊がある。
『フロイス日本史』副管区長が大坂に関白を訪れた時の歓待と恩恵について
このようにして我らを第八階まで伴った。
『兼見卿記』天正十五年二月条
相国仰せて曰く、殿主を見せらるべきの仰せ也。各々座を起つ、表の口を開き各々門に入る、八重ばかりか
「吉川経安消息」（『大阪市史』第一、大阪市参事会、大正二年所収）
大天守は八重にて候、言語に及ばざる事に候
『大友史料』第弐号（金洋堂書店、昭和十三年）
天主、重々之様子、是又、言説にも及ましく候、書戯なとハ、隙を明候、橋敷以上九ツ、奇特神變不思議との申事候、三國無雙とも可申候哉
『土佐物語』巻第十四（国史研究会、大正三年）
天守を見せらるべしとて、先立ち給へば、元親御跡に扈従して攀上れば、九層高く聳え、天に近く雁門を立て、是程こそありけめ

(48) 宮上氏論文註（7）参照

(49) 『フロイス日本史』豊臣秀吉編第九章（第二部七十五章）、副管区長が大坂に関白を訪れた時の歓待と恩恵について
彼は城内（天守）で登り降りする際には、低い桁がある数箇所を通過するにあたって足を留め、おのおのが上の桁で頭を打たぬよう注意して通るようにと警告した。

(50) 『フロイス日本史』豊臣秀吉編第九章（第二部七十五章）、副管区長が大坂に関白を訪れた時の歓待と恩恵について

城と副墨の間を通って連れて行くようにと命じ、我らは塔（天守）の下に赴いた。そこには鉄板で覆った一つの小さい隠し門があり、（後略）

(51) 『フロイス日本史』豊臣秀吉編第九章（第二部七十五章）、副管区長が大坂に関白を訪れた時の歓待と恩恵について

最終階には周囲に突出した外廊がついていた。

(52) 三宝院唐門の桟唐戸は漆塗であるが、平成二十一年に行われた修理工事の結果、菊紋・桐紋の彫刻が取り付けられている桟唐戸の綿板部分は、彫刻の裏側に隠れる部分において意図的に漆を塗り残しておいたことが判明した。また漆の塗り直しは認められず、慶長四年の建立当初のままであった。このことから、菊紋・桐紋の彫刻は、慶長四年当初からのものということが明らかとなった。詳しくは、浅井健一「国宝三宝院唐門の修理と垣間見た建築事情」（『建築史学』第五十四号、建築史学会、平成二十二年）を参照されたい。

(53) 一五九六年十二月二十八日付、長崎発信、ルイス・フロイス師の年報補遺

(54) 『フロイス日本史』において、松永久秀の多聞山城を訪れた際の記録に「柱の中央には同じ種類の非常に大きい薔薇（の彫刻）がありました。」とあり、薔薇は牡丹の見誤りであろうが、大坂城天守と同様であった可能性がある。

(55) 『フロイス日本史』豊臣秀吉編第九章（第二部七十五章）、副管区長が大坂に関白を訪れた時の歓待と恩恵について

(56) 詳細な検討は紙幅の都合上別稿に譲るが、『信長公記』の記述内容から復元される織田信長築造の安土城天主は、二重目と三重目が入母屋造の屋根で、棟の向きを互い違いとしていた可能性がある。大坂城天守は、天正十年に安土城天主が焼失してから約三年後に建てられたものであり、安土城天主の構造や外観を模倣していた可能性を否定することはできない。なお、天守の屋根形式の発展については、藤岡通夫氏（藤岡通夫『日本の城』、至文堂、昭和四十一年）・松岡利郎氏（松岡利郎「徳川幕府の大坂城天守再考」『大坂城と城下町』、思文閣出版、平成十二年）の研究があるが、安土城や大坂城といった初期の天守が含まれておらず、十分なものとは言いがたい。このことについても詳しくは、別稿で改めて述べることにしたい。

（広島大学大学院文学研究科）